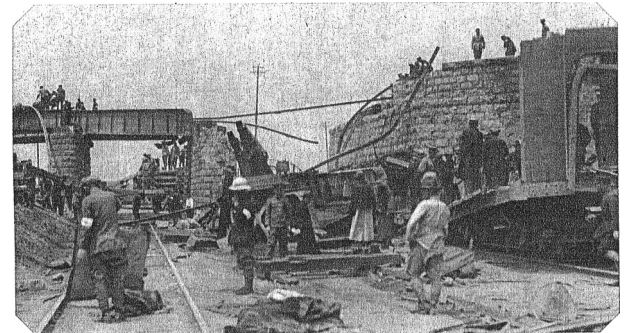


## 1. 先行史

- 1) 吉田松陰の「蝦夷、琉球、朝鮮、オホーツク、満州、中国、ルソン・・・獲得論」  
明治維新後、朝鮮出兵論に
- 2) 日清戦争（第1次朝鮮戦争）、日露戦争（第2次朝鮮戦争）に依る朝鮮植民地化
- 3) シベリア出兵：ロシア革命に乗じ、東シベリアに傀儡政権を樹立し、植民地化（失敗）

## 2. 満州事変前夜

- 1) ロシアの鉄道建設 → 華北、山東省からの移民流入 → 商品作物としての大豆  
鉄道までの馬車交通の発展 → 更に移民を呼び、大豆増産 ⇒ 正循環
- 2) 日本が日露戦争（第2次朝鮮戦争）により、南満州鉄道を獲得  
大豆で、満鉄、商社（三井物産）の大幅黒字
- 3) 満鉄・商社の利益急減・赤字転落
  - ①張作霖の大豆売買への進出 → 張軍の充実
  - ②張作霖・学良による平行線の建設（実は日本軍との合意事項：ソ連国境への鉄道と引換え）  
（葫蘆島の港も建設。実は輸送力は、満鉄≫平行線で主要因ではなかった）
  - ③世界大恐慌・・・こちらが主要因  
日本国内では軍が②のせいと宣伝戦（約束を守らない国）。新聞社の買収・圧迫も。



張作霖爆殺現場

- 4) 軍の不満
  - ①鉄道建設の進捗が遅い、増大する権益願望  
→ 一気に解決させる満州占領論
  - ②石原の「最終戦論」＝対米国戦争用の国力増強策として、満州領有。

**国家を強引：やればついてくる ⇒ 独断専行**

- 5) 張作霖爆殺：張学良軍と戦争を起こし、満州占領を目論む  
→張学良動かず、日本国内の軍中央・政府も対応せず  
⇒ 失敗

- 6) 満州建国計画：1931年3月から。
- 7) 張学良の国権回収計画：奪われたものを奪い返す  
ソ連に挑むが敗北 → 日本の権益に狙い



柳条湖事件現場（手前に持ち込まれた中国人の遺体）

## 3. 満州事変の経緯

- 1) 張学良軍の河北へのおびき出し：石友三軍の叛乱  
（日本の買収による）、11.5万の精鋭軍が河北へ  
蒋介石もこの時、中国共産党との戦い、汪兆銘との戦いで出兵中。
- 2) 鉄道爆破直後から北大營（張学良の軍事拠点）を攻撃、翌早朝には占拠。  
翌日には多数主要都市攻撃・占拠（奉天、長春、營口・・・）。  
初めから綿密に準備、政府承認を予定していない。
- 3) 政府の不拡大方針：中国を英国が支持 ⇒ 欧米とは事を構えたくない
- 4) 張学良の不抵抗方針：
  - ①蒋介石の指示（国際世論により、日本を抑える）

- ②日本政府に、軍を抑える力があると見込む
- ③実際問題として、軍主力精鋭部隊 11.5万人と華北にあり、戻れない(推測)

4) 吉林のテロ事件捏造

朝鮮軍の越境と本土からの増援を要請閣議で否定されるが、当初計画通り強行「独断専行」

→ 「出たものは仕方なきに非ずや」

軍の行動を追認、予算まで付ける。「やればついてくる」の現実化。

「統帥権」に負けた？  
本音は、「やりたい」？

以降、独断専行が横行。

旨く行けば褒められ、失敗は誰も責任取らず。軍の無責任行動の氾濫で戦争拡大。

第2次上海事件、南京攻略・・・等々

3. 陸海軍の独断専行を許す背景

「統帥権の干犯」を切り札として使用？

本当にこの言葉で金縛り？

本当は、軍のテロ・クーデターを恐れたのでは？  
満州建国後の5・15, 2・26他で現実化。

(今、「統帥権」は存在しないが、文民統制ができてないと暴走：日本は既に文民統制放棄済：  
統合幕僚長)

- 国会による調査権・統制権不在
- 予算審議の能力なし？ (1強多弱)

注) 独断専行そのものは軍隊に付きもの。

予定外の突発事項に、現実的に即座に対応する → 但し、明確な規範、限界が定められている必要がある。許容されるのは飽く迄、現場対応である。戦略レベルは勿論許容されない。日本軍の独断専行は政治戦略を軍が勝手におこなったことに問題。

「つぎつぎになりゆくいきほひ」 (丸山眞男「歴史意識の『古層』」)

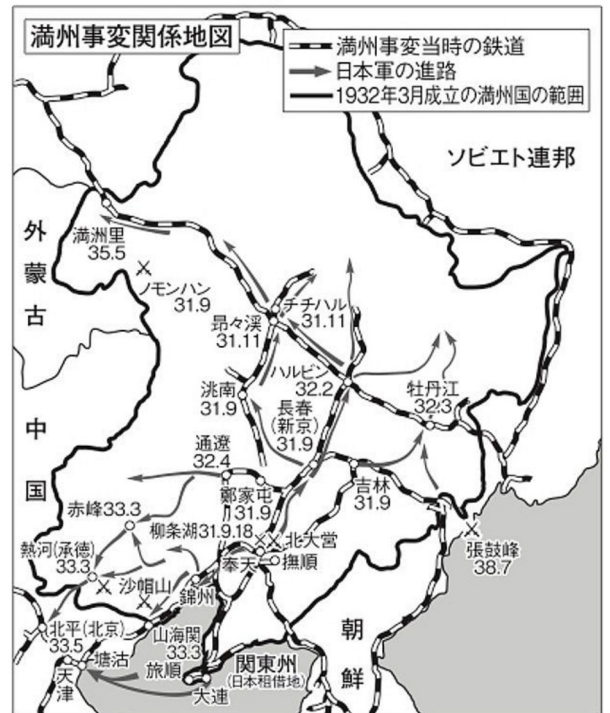
「悪法も法なり」・・・抵抗せず、順応する日本人

●国際世論対策：侵略でなく、「張学良の圧政に立ち上がる満州人を支援」の看板。

実は満州族はこの時点で、東北人口の数%



関東軍の独断① 満州事変の口火を切る  
関東軍、自作自演で



参考資料

- 1) 「満州事変から日中戦争へ」加藤陽子、岩波新書
- 2) 「財閥と帝国主義」坂本雅子、ミネルヴァ書房
- 3) 「満州暴走 隠された構造」安富歩、角川新書
- 4) 「シベリア出兵 住民虐殺戦争の真相」広岩近広、花伝社
- 5) 「馬賊の「満州」張作霖と近代中国」渋谷由里、講談社学術文庫
- 6) 「満州事変はなぜ起きたのか」筒井清忠、中公新書